

## 日照不足に対する農作物技術対策

令和元(2019)年7月22日

農政部経営技術課

宇都宮地方气象台より、日照不足に関する栃木県気象情報第2号が、令和元年7月19日に発表されました。

栃木県内では、6月28日頃から、日照時間の少ない状態が続いています。この状態は、今後1週間程度は続く見込みです。

農作物の管理にあたっては、次の技術を徹底するよう指導願います。

なお、農薬を使用するにあたっては、使用基準を遵守するよう指導願います。

日照時間（6月28日から7月21日まで）（速報値）

観測所	日照時間（h）	平年比（%）
宇都宮	13.0	17
日光	12.5	17

### I 普通作物

#### 1 水 稲

##### 早植栽培

(1) いもち病：梅雨入り後ぐずついた天候が続いており、葉いもちの発生ほ場率は42.3%となっている（植物防疫ニュースNo5）。今後も日照は少ない見込みのため、いもち病の発生増加及び穂いもちへの広がりが懸念される。ほ場の発生状況をよく観察し、発病を確認したら直ちに登録のある農薬で防除する。特に、中山間地域の常発地などでは防除を徹底する。



穂いもちの防除は、穂ばらみ期（出穂前7日頃～前日）と穂揃い期の2回防除を行う。

(URL: <http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/yosatu/2019/sokuhou/2019sokuhou5.pdf>)

(2) 稲こうじ病：日照時間が少なくぐずついた天気が続くと発生しやすくなる。銅剤（出穂期21～10日前に散布）や粒剤（出穂期21～14日前に散布）等により、適期に防除を行う。この期間以外の散布は効果が落ちるため注意する。前年度や前々年度に発生が多かったほ場は特に注意する。

(URL: <http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/gijutu/point/No20.pdf>)

(3) カメムシ類：今後、本田への飛来が多くなることが予想されている。常発地域等では早期発見に努め、登録薬剤により穂揃い期と乳熟期の2回防除を行う。発生の多い場合は7～10日後に追加防除を行う。特に、早生品種や周辺より出穂の早い稲については、集中加害を受けるので注意する。

- (4) 水管理：出穂期は最も水を必要とする時期なので不足しないようにこまめな間断かん水を行い、徐々にかん水間隔を伸ばす。台風通過後の乾燥した強風（フェーン）が予想される場合はやや深水にする。

### 普通植栽培

- (1) 水管理：田植後の低温・日照不足により、茎数の確保が遅れているほ場では、浅水管理で分けつ促進をする。ただし、還元状態になり稲の生育が悪い場合は間断かん水により生育促進を促す。
- (2) 穂肥：出穂前日数は必ず主幹幼穂長を測り把握し、穂肥は出穂前18～20日に10a当たり窒素成分で2～3kg（BBNK-202）を基準とする（幼穂長5～8mm程度）。
- なお、生育診断により生育量が小さい場合は早めに施用し、大きい場合は遅めに施用する。
- (3) 病虫害の防除
- いもち病：葉いもちの発生が見られる場合には、速やかに治療効果の高い薬剤を散布し防除を徹底する。

## 2 大豆

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底して、立枯性病害の発生を予防する。

## 3 こんにゃく

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。

## 4 ゆうがお

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。
- (2) 炭そ病、褐斑細菌病が発生しやすいため予防散布を徹底する。

## II 施設野菜全般

- (1) 軟弱徒長気味の生育となるため、ハウス屋根被覆の汚れを落とすなどして、採光を高める。また、曇天時は遮光資材を解放して、できる限り光線を当てるようにする。ただし、曇雨天後の強日射は軟弱に生長した植物体に高温障害、蒸散過多による萎れ等を引き起こすことがあるので、寒冷紗による遮光等、強日射・高温への対策を併せて準備しておく。
- (2) 灰色かび病等の病害が発生しやすい条件となるため、薬剤による予防散布を徹底するとともに、十分な換気を行い施設内の通風を図る。また、循環扇の活用により湿度低下に努める。

### Ⅲ 野菜

#### 1 野菜全般

- (1) 曇雨天時の葉かきや芽かき等は極力控え、これらの管理は晴天時の午前中に行い、夕方には傷口が乾くようにする。
- (2) 曇雨天日が長く続くと茎葉が徒長気味となり、生理的落果や病害多発の原因となりやすいため、古葉は早めに取り、風通しと日当たりを良くする。
- (3) 予防散布を徹底すると同時に、かん水や追肥は多量に行わず、1回当たりの量を少なくして回数を多くする。
- (4) きゅうり・なす・トマト等については樹勢が弱くなっている場合は、小果（S～Mクラス）で収穫し、株の着果負担を軽くし、樹勢回復を図る。

#### 2 いちご

- (1) 苗の活着後は、定期的な葉かきやポット等の間隔を広げる等の管理により、軟弱徒長を防止する。追肥は多肥にならないよう生育に応じて行う。
- (2) 炭疽病、うどんこ病を未然に防止するため、予防散布を徹底する。

#### 3 夏秋なす

- (1) 誘引がずれたものは誘引をやり直す。
- (2) 風雨により発生した傷果は摘果する。
- (3) 菌核病、灰色かび病の発生を未然に防止するため、予防散布を徹底する。
- (4) 樹勢維持のため、10 a 当たり窒素、加里を成分で3～4 kg程度追肥する。

#### 4 雨よけトマト

- (1) 樹勢が弱くなっている場合は、樹勢維持のため不良果の摘果を行い株の着果負担を軽くする。
- (2) かん水は一回当たり多量に行わず、天候をみながら回数を多くする。
- (3) 灰色かび病、疫病等の発生を未然に防止するため、予防散布を徹底する。

#### 5 夏秋きゅうり

- (1) きゅうりは浅根性で、滞水すると根が酸素不足になり生育が抑制されるので、特に排水対策を徹底する。
- (2) 花への採光性を良くし風通りを良くするため、側枝かきや葉かきは早めに実施する。
- (3) うどんこ病、べと病、灰色かび病等の発生を未然に防止するため、予防散布を徹底する。

#### 6 にら

- (1) さび病、白斑葉枯病の発生を未然に防止するため、予防散布を徹底する。

## 7 ね ぎ

- (1) 植付け溝への滞水を防止するため排水に留意する。
- (2) 土入れ・土寄せは、土が降雨後の加湿状態で行わない。
- (3) ベと病、黒斑病、さび病等の発生を未然に防止するため、予防散布を徹底する。

## IV 果 樹

### 1 果樹全般

湿害をさけるために果樹園に排水溝や明渠を掘って、園内が滞水しないようにする。傾斜地では、土壌の流亡を避けるために、草生栽培とし、当面耕運はしない。病害防除のため薬剤散布を行う際は、防除基準を遵守し、ドリフト低減に努める。新梢の軟弱徒長防止、花芽分化促進、果実肥大や糖度向上のために、必要に応じて夏季剪定を行い、樹冠内の日照を確保する。

### 2 な し

- (1) 果実肥大状況等をよく確認しながら着果管理を行う。
- (2) 黒星病の芽基部病斑、罹病葉及び果実は見つけ次第摘み取り、ほ場外に持ち出し処分する。薬剤による防除は雨前防除を基本とする。
- (3) 予備枝から発生した新梢を1～2本に整理する。また、混み合っている部分の新梢は数本取り除く。

### 3 ぶどう

- (1) 灰色かび病、ベと病、晩腐病の発生が懸念されるので、発生状況に応じた薬剤防除を行う。
- (2) 露地栽培では、摘粒終了後速やかに袋かけを行う。
- (3) ハウス栽培では、換気をこまめに行い、ハウス内の湿度低下に努める。裂果が多発した場合は、裂果粒を早めに取り除く。

### 4 りんご

- (1) 果実肥大状況等をよく観察しながら着果管理を行う。
- (2) 斑点落葉病、褐斑病等の発生が懸念されるので、予防防除を基本とし、発生状況に応じた薬剤防除を行う。

## V 花 き

### 1 花き全般

日照不足により、軟弱徒長になり品質の低下と灰色かび病等の発生を助長するので、晴天時以外の遮光等は取り除いてできる限り日照を確保するとともに施設内の通気等を図り湿度を下げるように努める。

## 2 き く

- (1) 露地ぎくは、ほ場周囲に排水溝を整備し、排水に努める。
- (2) 露地ぎくは黒斑病、褐斑病等が発生しやすいため、予防散布を徹底する。
- (3) 施設ぎくは、白さび病が発生しやすいため、予防散布に努めるとともに、病葉の摘除等発生しにくい環境にする。

## 3 ば ら

- (1) ベト病が発生しやすいため、湿度を下げるなど環境を整える。また、予防散布を徹底する。
- (2) うどんこ病が発生しやすいので、窒素肥料の多用を避ける。枯れ葉を整理し、通風を良くするとともに、予防散布を徹底する。

## 4 りんどう

- (1) ほ場周辺に排水溝を整備し、排水に努める。
- (2) 定植1年目の苗は葉枯病が発生しやすいため、降雨後に薬剤を散布する。
- (3) 花および茎に菌核病が発生しやすいため、予防散布を徹底する。

## 5 シクラメン

- (1) この時期窒素過多になると葉腐細菌病等が発生しやすくなるので、肥培管理を適正にし、病害の発生しにくい栽培管理に努める。

## VI 飼料作物

### 1 飼料用とうもろこし、牧草

- (1) 湿害が心配されるほ場では、排水溝などによる排水対策を行う。